



災害遺産と創造的復興

国際シンポジウム／ワークショップの記録

国際シンポジウム／ワークショップ 開催にあたって

2011年3月11日、日本は大きな地震と津波を経験しました。これから何年もかけて復興に取り組むにあたって思い出すのが、2004年12月26日に地震と津波によって大きな被害を受けながら、被災から7年たった現在、復興を進めているアチェのことです。

災害は不幸なできごとですが、アチェと私たちとを結びつけるきっかけともなりました。この関係を一時的なものにせず、より強く、そしてより長い関係にしていこうためには、私たちそれぞれの災害や復興の経験を共有する必要があります。私たちの経験は、日本とアチェだけでなく、これから災害を経験する世界の他の国の人々にとってもきっと参考になるに違いありません。

災害は、建物をこわし、人命や財産を奪うだけでなく、情報にも被害をもたらします。私たちの記録や記憶のよりどころとなる博物館や文書館、景観、文化・芸能の担い手に大きなダメージを与え、被災前と被災後の社会のあいだに断絶をもたらします。他方で、断絶した経験や、被災前と被災後の歴史を結びなおし、社会の連続性を回復させるのも人びとの記憶です。被災後に私たちは復興という新しい経験をしながら、さまざまな情報を再び集めたり、見直したりしながら新たに社会をつくりなおしていきます。ただし、復興過程のただなかでは、ともすれば大量の情報が十分に整理されないうまま放置されることになりかねません。そのような形で保存された情報は、一つ一つの情報には価値があっても、社会の中に位置づけられず、他の人が利用できません。

これを解決する一つの方法は、地域情報学の活用です。地域情報学を用いると、さまざまな種類の情報を同じプラットフォームの上に載せて相互に利用可能な形にすることができます。たとえば、地図の上に写真や文書といったさまざまな情報を掲載し、一目で地域の概要を示すことができます。単に多様な情報を集めて地図に載せるだけでなく、それらをいろいろなテーマに沿って活用することもできます。本シンポジウム・ワークショップで紹介するアチェ津波モバイル博物館は、地域情報学を観光開発に活用する試みであり、2011年に観光年を迎えたバンダアチェ市の人々と考えてきた成果を形にしたものです。また、将来的には、「小さな災害」に関する情報を蓄積することで、社会不安や治安の悪化といった社会問題の発生を早期に警告する「社会問題アラート」の仕組みを作り出すことも考えられます。

本シンポジウム・ワークショップでは、インドネシアやアチェの実情に即した情報整備や、それをもとにしたアチェの創造的復興を考えます。地域情報学の知見を生かした創造的復興に取り組むには、アチェに関わるそれぞれの人が関心や専門性に応じてどのようにシステムを活用したいのかを考える必要があります。また、情報を提供する人びとの協力も欠かせません。アチェで災害地域情報システムが機能するようになれば、アチェ社会あるいはインドネシア社会をいっそう発展させていくための道具となるでしょう。

本シンポジウム・ワークショップは、JST-JICA地球規模課題対応国際協力事業「インドネシアにおける地震火山の総合防災策」、シアクアラ大学津波防災研究センター、京都大学地域研究統合情報センター、科研費プロジェクト「災害対応の地域研究の創出：『防災スマトラ・モデル』の構築と実践的活用」の共催により開催されます。6日間のシンポジウム・ワークショップが実り大きいものとなることを願っています。

2011年12月21日 バンダアチェ

JST-JICA地球規模課題対応国際協力事業「インドネシアにおける地震火山の総合防災策」グループ4-2「地域文化に即した防災復興・概念」課題担当者

京都大学地域研究統合情報センター地域情報学プロジェクト 災害データベース担当者

京都大学地域研究統合情報センター「災害対応の地域研究」プロジェクト 研究代表者

科研費プロジェクト「災害対応の地域研究の創出——『防災スマトラ・モデル』の構築と実践的活用」研究代表者

山本 博之

開会の辞

イルワンディ・ユスフ(アチェ州知事)〈代理〉

Irwandi Yusuf (Gubernur Aceh) [Pengganti]



ご出席のみなさま、とりわけ京都大学地域研究統合情報センターからいらっしゃった林行夫先生、柳澤雅之先生、山本博之先生、そのほか日本からいらっしゃったみなさま、また津波防災研究センターのディールハムシャー先生、そのほかのご出席のみなさま、本日はようこそおいでくださいました。あらためまして、州知事よりみなさまのご来場を歓迎いたします。

現在日本は、まさに東日本大震災からの復興の途上にあると聞いています。このシンポジウムがアチェの今後の発展さらには日本の復興に役立つ成果を挙げることを期待しています。

アチェでは2004年12月26日に大きな地震と津波がありました。そして日本では2011年3月11日に大きな地震と津波がありました。これらのことは、アチェと日本が災害対応の経験を共有する機会となりました。このワークショップを通じて、新しい関係が日本とインドネシア、とくに日本とアチェのあいだに開かれ、ともに災害に対応する力を高めていければと考えています。

災害が起こったときに失われるものの一つが情報です。また、復興の過程においても情報が重要になります。新たな状況に対応するための情報や、新たな状況そのものを示すさまざまな情報があります。復興過程では、これらの情報は、復興に適切なかたちで、そして短い時間のあいだに処理していかなければなりません。こうした課題にどう対応するのか、またそれらの多様な情報をどのように保存し活用するのかが課題であると思います。

復興においては、政治学、経済学、防災学、そしてもちろん地域研究も含めた多様な分野にわたる学術研究の成果を、人びとが実際に使えるかたちにすることも重要です。州政府は、学術研究と人びとを結ぶ橋渡し役としてシアクアラ大学津波防災研究センターがあると考えています。ワークショップを通じて、地域の発展、国民の発展に役立つ人材、とりわけ災害対応の分野で貢献する人材づくりがされることを期待しています。

また、そのような橋渡しの成果の一つとして、今回のシンポジウムを通じて紹介される津波モバイル博物館があると考えています。情報技術はそれだけでは役に立ちません。それを使おうとする人びとの意思、そして必要な情報をそれぞれの人びとや機関が提供することが必要です。人びとの協力と活用意思をもってすれば、情報技術を通じてアチェの経験が世界に発信され、それを通じて世界のさまざまな国にとってアチェがモデルを提示することが可能になるだろうと考えています。

このシンポジウムを通じて、京都大学地域研究統合情報センター、シアクアラ大学津波防災研究センター、そしてアチェ州内外の関係する諸機関が力を合わせて、アチェで、またインドネシアで、とりわけ災害対応の分野において、人びとが求める課題を克服し、さらに発展へと進めるための成果が得られることを期待しています。

ここに、アチェ州知事イルワンディ・ユスフとして、本シンポジウム・ワークショップの開催を宣言いたします。

歓迎の辞

ダルスマン(シアクアラ大学副総長)

Darusman (Pembantu Rektor IV, Universitas Syiah Kuala)



京都大学地域研究統合情報センターよりお越しの林行夫先生、柳澤雅之先生、山本博之先生をはじめとする京都大学からのみなさま、また JICA (国際協力機構) からご参加の遠藤清美さん、京都大学東南アジア研究所の浜元聡子さん、シアクアラ大学の防災研究専攻の大学院生のみなさん、シアクアラ大学津波防災研究センターのディルハムシャ先生ほかアチェ州政府の各部局の方がた、本日はありがとうございます。

本来なら学長がまいるところですが、本日はアチェの外におり残念ながら出席できません。代わって、副学長である私がお挨拶をさせていただきます。シアクアラ大学のすべての教員、学生を代表して、本国際シンポジウムにお越しくださいましたみなさまに歓迎の辞を述べます。

7年前を思い起こしますと、私たちはあの日、すべてのものを失いました。家族、知人、財産、そして貴重な情報、データもまた失われました。情報はたいへん重要です。私たちは、津波とその後の復興についての情報を集めていく必要があります。また、ただ集めるだけではなく、データベースなどにすることで、さまざまな人びと——国内の人だけではなく国外の人も含めた世界中の人びとにきちんと伝わるよう、共有される仕組みが必要だと考えています。津波以降に生じた事柄に関する情報もたくさんあります。それらの情報もきちんと整理して、さまざまな人びとに共有される経験となるようにしたいと考えています。

それらの情報やデータをきちんと整理するうえで、情報技術の利用は欠かせません。また、そのうえでは地域情報学の知見も必要です。加えて、それぞれの地域の文化や社会に対する深い理解が必要であると思えます。

私どもシアクアラ大学が防災研究の拠点として創設した津波防災研究センターが、これらのデータを取りまとめて整理し、世界に発信するうえでの拠点となることを願ってやみません。津波防災研究センターがネットワークを拡げ、インドネシア国内だけでなく国外のさまざまな機関、研究者、社会と密接な関係をつくりながらネットワークを拡げることを願っています。本日のこの機会は、津波防災研究センターが京都大学地域研究統合情報センターとネットワークを結ぶまさにそのときであると考えています。

また、本日のシンポジウムを支援していただいた「JST-JICA 地球規模課題対応国際科学技術協力事業・インドネシアにおける地震火山の総合防災策」には深く感謝の言葉を申し上げたいと思います。

私たちは、このようにして津波防災研究センターと京都大学地域研究統合情報センターが協力関係を発展させることを歓迎し、大きな期待を寄せています。本日を一つの大きな契機として、津波防災研究センターが災害対応や災害の影響に関する情報を整理し、将来災害を迎えるであろうさまざまな地域社会の人びとにとって共有すべき経験が発信されることを願っています。

本日のシンポジウムを通じて、ご参加のみなさまが大きな成果を得られること、また、本日の場に來られなかった方がたにもその成果を共有すべくそれぞれの方がたが活動されることを願っています。それらは情報技術の活用を通じてより円滑に進められることだと思います。研究者も一般の人びとも、また、日本からの参加者のみなさまもインドネシアからの参加者のみなさまも、さまざまな人びとがこの場に集い、それぞれがアイデアを持ちよることで、今後の大きな教訓や学びを得られるとよいと思っています。

本シンポジウム・ワークショップの成果を通じて、アチェにあるさまざまな貴重な情報がまだきちんと扱われていないものが発見され、活用され、整理されることを期待しています。

国際シンポジウム／ワークショップ 開催挨拶

京都大学地域研究統合情報センター と地域研究

林 行夫(京都大学地域研究統合情報センター長)

Yukio Hayashi(Center for Integrated Area Studies, Kyoto University)



プーハバ。こんにちは。みなさま、はじめまして。京都大学地域研究統合情報センター長の林です。このアチェにおいて、本日より6日間にわたる国際ワークショップの場に居合わせることができたことを、まことに光栄かつ心より嬉しく思います。この会議を準備し、共催支援してくださいました国立シアクアラ大学津波防災研究センター(TDMRC)やJICA、および内外の関係者の皆様に心より感謝しつつお礼申し上げます。開会の辞としまして、わたしども地域研究統合情報センター(地域研)の概要紹介と地域研究について、簡単に述べさせていただきます。

地域研は、2006年4月、京都大学に全国共同利用施設として設置されました。設立6年目の若い研究所です。昨年度から、文部科学省より共同利用・共同研究拠点と認定されました。さまざまな地域研究を進める日本国内の研究関連機関との共同・協力を促進し、地域研究の発展に寄与することを目的として創設されたきわめてユニークな組織です。普通、地域研究の研究所には、国名や文化、政治、地理的範囲を示す名称がつきますが、地域研にはそれがありません。

現在、教授、准教授、助教からなる教員13名が、「地域相関」、「地域情報資源」、「高次情報処理(地域情報学)」のいずれかの研究部門に属して、専門の研究分野や地域を横断する研究、情報学の手法を応用した地域の情報の共有化を進めています。組織の名に特定地域がないのはそうした理由からです。とはいえ、教員には各自専門とする地域や情報学のような専門分野があります。地域の範囲は、東アジア、中央アジア、東南アジア、南米ですが、スタッフは個々の経験的研究を軸に、特定地域の専門家間で流通・消費されるにとどまらず、地域を横断するテーマで地域研究の新たなあり方や手法を具体的な形にしていこうとしています。その意味では、世界でも類をみない、新時代の研究施設といえましょう。

地域研は、地域や専門を横断するために、公募でユニークな仕組みの共同研究を推進しています。同時に、「英国議会資料」の整備に始まる地域情報資源の共有化を進め、内外の研究組織の協力を得て、システム開発と共有化のプラットフォームを公開してきました。

また、全国の地域研究関連組織の連携に貢献しています。2004年発足の「地域研究コンソーシアム」(JCAS)の事務局を担い、その活動を全国加盟組織と協力しつつ推進してきました。週間頻度で「地域研究メールマガジン」(日本語)を配信し、地域研究関連のシンポジウムや研究会の案内、JCASと関連組織のプロジェクトや公募情報も発信しています。加盟組織は現在93にのぼり、共催・支援した研究活動や集会の数は100を越えます。

昨年度より、地域研は、相関型地域研究と情報学を両輪とする研究をかたちにするべく、5年計画でセンター内に「地域情報学プロジェクト」を発足させました。内外の教員の研究、共同研究などで長らく蓄積されてきたデータを情報学の手法でとりまとめ、2011年度を迎えた現在、地域研独自の地域情報学の成果を国内外に公開・発信しつつあります。まさに、本日より始まる災害マッピングもその重要な成果のひとつです。海外では記念すべき初の公開になります。

このように地域研は、公募による学際的な研究交流を深化させるとともに、データベースの構築と公開、共有化システムの試行と公開を推進してきましたが、今年3月11日に東日本大震災が発生しました。地域研は、災害復興への地域研究の関わりから、今回の災害マッピングの創案者にしてリーダーである

西芳実博士と山本博之博士を中心に内外で研究成果を公開するとともに、原正一郎博士が情報共有の観点からデータベースを肩代わりするなど、被災地支援のために新たな公募研究をたてて貢献しようとしてきました。

東日本大震災は、原発事故をふくめ、多くのかけがえのない人々の生命と地域の暮らし場とその風景を奪い、国内と世界に大きな悲しみとともに様々な問題を投げかけました。アチェの皆様には、身をもってこのことを了解していただけることと存じます。その尊い犠牲のうえにたち、人と人との繋がりとは何か、協同とは、共生とは何か、そして地域とはいかなるものであるのかが根源的に問われています。

ロシアの文学者の言葉に、「幸せの色は誰にとっても同じだが、悲しみや苦しみの色は人それぞれである」というのがあります。人との関わりと特定地域を軸とする地域研究には、危機的な状況が広まった現在でこそ、伝えるべきメッセージと果たすべき役割があります。アチェと日本で起こったことは、世界が共有すべきことなのです。

ある地域での事象を比較しつつ、課題や問題点を浮き彫りにし、解決にむけて貢献しようとすることは、今そして近未来の地域研究に必要な態度であろうと心得ます。地域研究の成果は一研究者や学界に止まらず、研究対象地域に還元されなくてはなりません。今回のワークショップは地域研の研究活動の一端ではありますが、国立シアクアラ大学津波防災研究センターと地域研との学術交流協定締結も織り込むことで、今後の友好はもちろん、そうした研究協力関係が継続されていくことを切望しております。

繰り返しになりますが、地域研究の原点は個別の地域を生き、グローバルな地域を築き、地域にさまざまなかたちで関わる人びとの相互作用にあります。今回の国際ワークショップが、設置後5年を経た地域研そのひとつの重要な成果として生まれたことを強調しつつ、本日より、みなさんと活発な議論が密になされることを願ってやみません。

国際シンポジウム／ワークショップ

歓迎挨拶

ムハンマド・ディルハムシャー(シアクアラ大学津波防災研究センター長)

Muhammad Dirhamsyah (Direktur, TDMRC, Universitas Syiah Kuala)



本日はみなさまお越しくささいまして、ありがとうございます。アチェ州政府を代表して、アブドゥル・ラフマン・ルビス州知事代理および関係諸部局からお越しいただいています。そのほかにもさまざまな機関からお越しいただいています。ありがとうございます。

2004年12月26日にアチェで津波が発生して以降、さまざまなことがありました。津波やその後の復興に関する情報もたくさんあり、それをどのようにまとめるかが課題になっています。また、日本でも2011年3月11日に大きな地震があったことは、みなさまご承知のとおりです。

本日、京都大学地域研究統合情報センターとシアクアラ大学津波防災研究センターの共催により、国際シンポジウム「災害遺産と創造的復興——地域情報学の知見を活用して」を開催します。開催にあたっては、JST-JICA地球規模課題対応国際科学技術協力事業「インドネシアにおける地震火山の総合防災策」をはじめ、さまざまな機関からご支援をいただいています。本日より12月26日まで、地域情報学を活用してどのように地域の発展を進めていくのかについて考えたいと思います。

本日お越しの諸機関のみなさまは、それぞれ情報を扱っていると思いますが、その情報をぜひ開かれたかたちで利用できるようにご協力をお願いしたいと思います。情報をそれぞれのニーズに応じて使われるかたちによってこそ、アチェを科学や文化、歴史、さまざまな分野において開かれた場所にすると思います。本日のシンポジウム・ワークショップが、その大きなきっかけとなることを願っています。

歓迎挨拶

ムハンマド・ナシル(シアクアラ大学大学院事務長)

Muhammad Nasir (Sekretaris, Program Pasca Sarjana, Universitas Syiah Kuala)



みなさま、本日はご出席ありがとうございます。私は、シアクアラ大学大学院長の代理としてまいりました大学院事務長のムハンマド・ナシルです。

2011年3月11日の東日本大震災では、たいへん大きな犠牲が出たと伺っています。人的な被害、物的な被害、ともに大きかったと聞いております。ともに津波で大きな災害を経験した両国が災害対応に関して協力を進めることはたいへん喜ばしいことだと思います。とくに、災害後の復興・再建のプロセスは早く展開するため、それに関する情報はさまざまに多様なまま、十分に整理されていません。地域情報学の知見を用いてこれらの情報をどのように整理するのか考えるという目的で行われるこのワークショップを私たちは歓迎しています。

今回のワークショップでは、地域情報学のさまざまな知見が共有されると伺っています。また、地域情報学の一つの大きな成果である災害情報マッピング・システム——「災害と社会 インドネシア災害情報マッピング・システム」と「2004年スマトラ沖地震・津波アーカイブス」の二つが公開されるとも聞いています。

このワークショップで期待されるもう一つの成果としては、津波ツーリズムがあります。バンダアチェ市内にはさまざまな津波の遺物がありますが、これらをもとに地域の創造的復興をとげる地域開発の基礎としたいと考えています。

また、本ワークショップでは、シアクアラ大学の防災研究専攻の大学院生を中心に、地域情報学の技術についての講習会が開かれます。これはシアクアラ大学の大学院教育にとっても大きな貢献になると期待しています。さらに、本ワークショップを通じてシアクアラ大学津波防災研究センターと京都大学地域研究統合情報センターが今後の研究・協力や他のさまざまな開発において持続的な協力関係が築けることを期待しています。

このたびのワークショップが、すでに開発された災害情報マッピング・システムを用いてバンダアチェ市に津波モバイル博物館を発展させる契機となればと考えています。また、シアクアラ大学津波防災研究センターと京都大学地域研究統合情報センターとのMoU(大学間学術交流協定)が結ばれることで、両者の協力関係がより発展すると期待しています。

研究科を代表しまして、本日ご列席の報告者のみなさま、参加者のみなさまに感謝の言葉を申しあげるとともに、本ワークショップ・シンポジウムの盛会を祈ってご挨拶とさせていただきます。